

子どもの教育支援のプロに聞く！ フィリピンの子どもたちと支援活動のヒント

2010年度 第2回 2010年8月9日(月)

講師：松浦 宏二（特活）チャイルド・ファンド・ジャパン 募金担当
（講義実施当時）

【学習目標】

- ・フィリピンの教育の現状と支援方法について理解を深める。
- ・フィリピンの社会背景、フィリピン人の特徴を踏まえ、NGOのタイプや付き合い方について、経験者から学ぶ。

どこまで支援するのか

松浦：私たちの団体はもともと戦災孤児に対するアメリカの団体からの支援の受け皿だった。1975年に支援が終わったとき、日本人として何かやらないといけないのではと思い、当時関係者が東南アジアの状況を見てフィリピンに支援を始めた。

NGOが活動の途中で壁に突き当たったときは、最初に「なぜ」始めたのかというところに戻ってみる必要がある。

NGOに対してどのように活動すればいいか教えてくれるところはない。NGOは支援を受けたいのでいいことしか言わないが、失敗はたくさんある。皆がその失敗を分かち合って学ばばいい。自分がいいことをしているのだとうぬぼれてはいけない。結果を出すにはどうしたらいいか、自分たちでできる範囲はどれだけか、常に考えなくてはいいけない。

一般の人から見るとNGOの正義感はうさんくさく見えるが、現場を見れば何とかしてあげたいと思うだろう。その気持ちをいかに支援につなげるか考えなくてはいいけない。

参加者：農村の子どもに奨学金などの援助をしている。卒業しても職がないことが多く、職探しまで私たちがやる必要があるのかと思うことがある。

松浦：それはどこまで支援するのか、何を達成するのかにかかわってくる。

参加者：私たちと協力関係にある団体がマニラにあるが、日間に考え方のずれがある。

松浦：問題の背景によっては、フィリピン人は「日本人が私たちに支援して当たり前」と思っている場合がある。一方的に私たち日本人が支援するのではなく、弱い立場の人たちも人間としての尊厳を持つべきで、自立して生きて行くことは大事なことという認識を持つ必要がある。それを忘れて湯水のように支援してはいけないと思う。

私たちの場合、大学生への支援はコストが高いため、基本的にハイスクールを卒業するまでしか支援しない。さまざまな状況のなかで、自分たちとカウンターパートの能力を考え、何を支援するのか、を現実的に考えなくてはならない。

「やってくれるだろう」ではなく、何をしてほしいかを明確にする

フィリピンのNGOとの付き合い方について。フィリピン社会は人脈でものが動くところがある。うまく関係をつくってあげばいい方向に動くのではないかな。1度会ったきりでメールでやりとりするのではなく、顔が見える関係を維持することが大事。

利害関係でつながるのではなく、理念を共有する。それがなく、やたらに「お金をくれ」「今日は会議だから高級レストランに

行こう」という人には気を付けたほうがよい。ただし、食事やミリエンダ（おやつ）を共にすることはフィリピンでは大切なので、うまく使うとより良い人間関係ができる。

フィリピンでは日本か

ら来たというだけで金持ちと思われるので、現金はあまり持っていない方がいい。私たちの団体では支援先の家族や子どもに現金を渡すことは一切せず、学用品を渡すとか、保護者が支払った学費領収書と引き換えに支払っている。お金に関わることには気を付けないと人脈を壊すことにつながる。

そして、日本人の悪い癖である“後出しじゃんけん”をしないこと。つまり、目標や何を達成するか、いつまでにやるのかなどを、事前に紙に書いて明確にし、カウンターパートと契約を結ぶこと。そして（進捗報告などは）フォーマットを渡して、「ここに書いて送ってください」と指定する。私たちの場合は毎年1回、成長の記録、子どもの名前、身長・体重、学年、成績、子どもを担当しているソーシャルワーカーのコメント、最新の写真などを記すフォーマットがある。フィリピン人は人あたりがよく、物分りがよさそうに見えるが、こちらの気持ちをおもんばかって、やってくれるだろうという日本的な期待は通用しない。



活動経験を共有する参加者

参加者：フィリピンの人に自発的に動いてもらうのは難しいことがある。

松浦：仕事の内容と手順を決まった形にすればやりやすくなる。ポイントはその仕事をする責任者を育てること。フィリピンでは、ある程度お金を出せばそういう人が見つかるし、そういう人たちと理念を共有することができる。

フィリピンでは日本のNGOのように(無償)ボランティアでやるとか、お金のないところで努力してやるという人は少ない。教育を受けた人がそれを仕事としてやっているため、そ

フィリピンNGOの類型

社会運動系、教会・学校系、企業系、財団系、政府・政治家系があるが、私たちは主に教会・学校系の団体と協力して活動している。フィリピンの地方の学校は、地域社会に対して社会サービスを提供するケースがある。責任団体として学校と契約し、センターの費用やスタッフを雇う費用を私たちが支援する。

政治家がやっているNGOは、政治家としての目的を持っており、気を付けた方がよい。日本の小さなNGOと一緒に活動しやすく安心できるのは、教会・学校系のNGO。また学校系は教員などのリソースを持っている点が良い。大学では、経営学の先生がスタッフの研修をしてくれる場合もある。

日本のNGOの課題

～理念に支えられた、恒常的な支援、担い手を育成する支援への転換～

感情的、主観的な支援から、理念に支えられた枠組みを持った支援に転換できるか、ボランティアな支援から恒常的な制度としての支援に転換できるのか、そして活動の担い手を育てる支援に転換できるか、これらが日本のNGOの課題だ。

ボランティアの精神を失ったらNGOとしてはダメだと思う。どれ

子ども支援活動のポイント

子どもの支援においては、学校を卒業することも健康に育つことも大事だが、子どもが自分自身をつくっていけるかが、私たちの支援では大切なポイントである。子どもにとって本当に大事なことは何なのかを考えながら支援していくことが大切。

もう一つ大事な事は、子どもの家族と地域社会への働き掛け。子ども、家族、地域社会—それが私たちの活動の柱と位置付けている。家族に対しては職業訓練などを行い、経済力を付けていく。

支援対象の家族やスタッフに、「日本人はお金があるから、日本人に頼ってればいい」という意識がどうしても出てくる。その意識をどうやって変えられるか考えていたときに、思いついたことがある。

あるとき、支援地域を訪問した際、「おまえは宝探しにきたのか」と言われた。戦時中に日本軍が隠した宝があるという噂があったためである。自分の力で切り開いてほしいということ、どう言ったら分かってもらえるかと考えていたら、宝の話を出

ういう人をつかまえるには、それなりの給料を出さないといけない。

フィリピン側のスタッフが仕事をしないときは、その人を解雇する。逆にスタッフはよいがその人が所属する団体がだめなときは、団体との関係を断ち、スタッフを私たちの団体で雇ったこともある。そこまでやらないと、きちんとした仕事をしてもらえない。



参加者が共有した日頃抱える悩みを整理する講師

フィリピンは8割がカトリック。教会系NGOは社会的に認められており、地域のなかに入りやすい。ミンダナオが内戦になっ

て避難民の支援をしたとき、教会系のスタッフに「日本人は誘拐される」と言われ、現場に行けなかった。カトリック教会というのは地域社会の末端までの情報を持っているので安全。

社会運動系のNGOの中には政治的な色がある団体もある。開発事業と一緒にやる場合はよく確認した方がよい。

だけ自分たちの最初の熱い思いを抱き続けながらやっていけるか。また団体として活動の担い手を育てるといふ組織運営も課題だ。最近はNGO向けにさまざまな研修があるし、人材育成に時間とお金をかけることも必要。

した。村の人たちに「以前、隣の村で宝探しに来たのかと聞かれ違うと答えたが、よく考えてみると私は宝探しに来たのかも知れない」と言ったら皆の眼が輝いた。「私が探している宝というのは、皆さんの子どもたちが持っている宝です。可能性を秘めている子どもたちを学校へやれば、皆さんにとって宝を生むようになりますよ」と。

「私たちはいつまでもここにいるわけではない。10年後には撤退します。それまでに子どもたちが持っている宝と一緒に探しましょう」。それを聞いて感激した人とがっかりした人と半分ずつだったが、納得してくれたと思う。

講師紹介

松浦 宏二 (まつうら・こうじ)
 (特活)チャイルド・ファンド・
 ジャパン 募金担当(講義実
 施当時)

